

■安の大花田植の由来

昔、大町五軒家(今の安佐中の辺り)に、喜左衛門と言う豪農がいました。湿田9町8反を持ち、田植えの時には、近所は勿論近郊の村から多数の人手や役牛の応援を得て田植えをされていたそうです。そのうち、応援に行く人達は、牛を飾り、早乙女も衣装を着飾って田植えをするようになったと言われています。これが安の花田植の始まりです。

江戸時代(寛政年間1797年)から途中途絶えはしたものの約200年以上もの長い間、安地区で盛んに行われてきました。しかし、昭和34年に長楽寺の観音田で行った「安の花田植」を最後に、時代の流れの中で、農業の機械化や都市化が進み「安の花田植」は途絶えてしまいました。

先人達が残してくれたこの素晴らしい伝統芸能がこのまま過去の史実に終わってしまうのではないかと懸念から、平成15年より「安の花田植」を後世に伝えて行こうという活動がスタートし「安花田植保存会」が設立されました。幸いにも「安の田植唄」の楽譜とテープが見つかり、当時を知るわずかな聞き伝えを頼りに早乙女踊りや采振りを形として再現することができました。

そして、平成18年に「安の花田植実行委員会」を立ち上げ、使用する太鼓や衣装などの道具を手作りで準備し、実際の田んぼにおいて、「大朝飾り牛保存会」の協力を得て飾り牛の代掻き、早乙女踊りや采振り、太鼓などによる「安の花田植」を47年ぶりに再現しました。この再現した「花田植」を初めて見た人々は、想像以上の迫力と、遠い昔の先人達の生活と知識を思い描くことができ、先人達が残してくれた伝統芸能の素晴らしさに感動しました。



大正時代と思われる花田植



早乙女(さおとめ そうとめ)

かすりの着物と笠で着飾った早乙女は、音頭出しの唄と演奏に合わせて苗を田んぼに植えていきます。地域の小学生から、大学生、お母さんまで二十数名の早乙女が揃います。練習も含め、生まれて初めて田んぼに入る早乙女もあり、おぼつかない足元で一生懸命植えていきます。



飾り牛(かざりうし)

田植えの直前に、田んぼの土を平らにならすことを代かきといいます。花田植では、花鞍や打ち敷などで飾られた牛が代を掻きます。代かきのまわり方には、沢山のパターンがあり、「おいわけ」「びょうふ」などの図をかき、その回り方をします。



采振り(子ども采振り)

田んぼのあぜに立ち、音頭だしの唄と笛、太鼓に合わせて、舞いを踊り、田の中にある早乙女の田仕事を励ましますのが、采振ります。女の子は花笠と浴衣とまとい采をふります。男の子は、法被をきて小太鼓を打ち鳴らします。



太鼓打ち

田の中に入り、音頭だしの演奏に合わせて、正面に抱えた大太鼓を両手でドーンと打ち鳴らし、花田植全体を盛り上げます。大きな太鼓の響きと勇壮な踊りが大迫力です。

音頭出し

サンバイ・小太鼓・唄い・お囃子・鐘・笛などの鳴り物。これらを合わせて音頭出しと呼びます。安では「道行」「勇み田」「別れ」「さいふりのうた」「代かき唄」が伝承されています。これらの唄は、安地区独特のものと言われている。



【安の花田植写真コンテスト】

安公民館、安東公民館にある応募用紙でご応募ください。

募集期間：平成30年7月1日(日)～7月30日(月)

詳しくは応募用紙をご覧ください。



平成29年度
写真コンテスト最優秀賞
「花田植スタジアム」
撮影者 山田泰司氏

交通 アストラム上安駅下車徒歩10分
広電バス 広島駅発 安佐動物園方面
中萩原下車 徒歩1分
第一タクシー あさひが丘・飯室方面
上安駅乗車 中萩原下車

車 県道38号線動物園入口交差点を動物園方向
300m先付近に臨時駐車場あり。
満車の際にはご容赦ください。